

母子関係からみる

母と子のゆたかな生物学的関係



小林 登

▶国立小児病院 院長／東京大学 名誉教授

はじめに

不幸にして先天性の消化器系疾患をもって生まれ、生後間もなくから、何年間も小児病院に入院して看護婦に育てられている子どもがいる。地理的な関係もあって、母親はたまにしか見舞いに来れないが、その時のその子どもの反応は強く、母親に甘える姿は、世話する看護婦を驚かせるほどである。「子どもにとっては、いつも世話している私たちよりも、母親のほうがいいんだなあ」というのが、彼女たちの実感である。

また、逆に長期入院していた子どもを、状態のよい時、週末など自宅に帰すことがある。子どもはもちろん喜んで母親に甘えたりするが、時々ドアの方に目を向けるそうである。看護婦の入って来るのを待っているのである。

母子関係、さらに子どもの健やかな発育、とくに心の発達に関心をもつわれわれに、これらの事例は何を問いかけているのであろうか。なにか、母子関係を考える場合、単に心理学的な立場ばかりでなく、生物学的な洞察も必要ではないか、と思うのである。それはわれわれのように、医師にとっては、ゆずることのできない立場である。しかし、精神と心理を生物学的に捉えることは決して簡単ではない。

編集子の求めに応じ、日頃考えていることを中心に母子関係を論じてみたい。

母子関係研究の歴史

現在、それぞれの分野で母子関係が研究されているが、従来の研究の流れを知ることは重要である。簡単に整理してみる。

ヨーロッパの小児科学の歴史の中では、いろいろな理由で、親、なかんずく母親から分離されている乳児、とくに孤児院に収容されている場合には、いかに良い施設でも発育が悪く、感染症を合併して死亡することが多く、言語発達とか精神発達の遅れがめだつと言われてきた。さらには、このような環境にいる小児の中には、体を前後にゆする行動(ロッキング)、頭を壁や家具にぶつける行動(ヘッドバンピング)などの行動異常も見られた。これがいわゆる、“institutionalism”(施設症)である。

施設における小児の発達遅滞、行動異常、とくに易感性、高死亡率を見た小児科医は、こういった恵まれない子どもたちに、当時の良い小児医療を提供したいと考え、善意によって社会を動かし、多くの孤児院を小児病院にした。続いて、小児科学の体系づけとともに、今世紀の初頭にはこれらの小児病院の医療はそれなりに向上して、現在世界の各地に見られる小児病院の基盤になったのである。

しかし、こういった小児病院でも、小児看護学は体系づけられず、また現在のように入院中の小児に対する心理学的な配慮はなく、乳児患

児の中からは institutionalism は消えず、“hospitalism” (病院症) として残った。

当時の小児病院では、3歳に満たない子どもの多くは、母親から引き離されて (maternal deprivation、母性剥奪)、病室で孤独な生活を強いられているうちに、表情は少なくなり、淋しそうに無為茫然としてアフジャーの状態におちいる。オモチャや両親に関心を示さなくなり、なかには下痢が続き脱水症状を呈する場合さえみられることを、病棟の小児科医や看護婦はみてきたのである。

さらには、青少年の非行や犯罪に関係する人々は、そういった子どもたちの発育歴を見ると、乳児期から幼児期にかけて孤児院 (乳児院) とか養護施設などを転々と回されている事実がみられた。

Institutionalism、hospitalism、また青少年問題の解決を目指して、1920年代に入って、心理学者さらに小児科医が母子関係の研究を始めたのである。そして、1930年代に入って研究は活発になり、S. Freud の精神分析学の流れをくむ R. Spitz らにより、さらに第二次世界大戦により発生した多数の孤児問題により、対象関係論を中心とする J. Bowlby、そして D. W. Winnicott の研究へと発展した。すなわち、健全なる心理発達の基盤の、子どもの母親に対する“アタッチメント (子どもの母親への愛着) 形成理論”である。

従来のこういった考え方は、次の二つに整理できる。

第一は、二次性強化説であって、乳児が飢餓や渴きを、生後約1年間にわたる数千回の哺乳による満足体験の繰り返しによって、母子間の結びつきが形成され強化されるという考えである。乳児の生存にとって基本的な欲求の充足に、母親という人物像が重要な意味をもつようになるのは学習の結果であるというのである。

第二は、精神分析学の性的エネルギー論に基づく S. Freud の考え方であって、人間の心を動かすメカニズムのエネルギーは、広い意味で性的なもの (リビドー) であるとするのである。す

なわち、乳児が母親に結びつくのは、リビドーが母親を対象にし、自己保存の必要から母乳の乳房を吸う時に、同時口唇部位におけるリビドーの満足感を反復体験することによると考えるのである。「母乳を吸うこと」は、子どもの自己保存の本能のいとなみであるが、リビドーの満足感が充足される出発点が本能に依存していることから、“本能依存性的エネルギー説”と呼ぶことができるであろう。

いずれにしても、アタッチメント論は、子どもの母親に対する母子関係論であった。しかし、アメリカの小児科医たちは、母子関係の破綻のプロトタイプとして “battered child syndrome”、すなわち小児虐待が問題となり、母親のわが子への母性愛の成立のメカニズム、“maternal infant bonding” 「母親のわが子への絆形成」の研究が始まった。それは1970年代に入って、M. H. Kraus、J. H. Kennell らの研究であり、子どもの母親に対するアタッチメント形成と母親のわが子に対する母性愛の成立は相互的、相補的であるとして、「母子相互作用」 “mother infant interaction” という概念をつくった。

母子相互作用という考えは、筆者にとってシステム論的であり、情報論的であって、免疫学における T cell、B cell などの免疫細胞の相互作用に対比できると考え関心をもった。後に、母子相互作用についての筆者の考えを述べてみたい。

母子関係の生物学的な特性

親子関係、なかんずく母子関係は、生物学的にユニークな特性を有することは周知の通りである。

まず言えることは、親子関係というものは、父子・母子にかかわらず、その半分の遺伝子は共通であることである。すなわち、子どもの体の染色体にある対立遺伝子は、健康ならば、それぞれ父側と母側のを保持している。社会生物学では、利他行動を遺伝子の保存を目的とするものとして説明している点を注目すべきであ

る。育児行動の中に、利他的な面を考える場合に問題となろう。

社会学的にみると、人間は人生のライフサイクル中で多彩な人間関係をもつが、その中で母子関係は最初のもので、しかもきわめて生物学的である。すなわち、妊娠により、母子関係は始まるからである。しかも、胎児期は臍帯・胎盤を介し、乳児期は母乳哺育を介して、母子は生物学的に結合している。

胎児期に母子間を生物学的に結びつけているのは、臍帯・胎盤・子宮内壁という解剖学的なものばかりでなく、胎盤を介して母子間では活発な代謝のやりとりが行なわれている。また最近では、妊娠後半になると、心理的な側面も無視できないと考えられている。すなわち、胎児の中枢神経系の発達、形態的に未熟であっても、機能的に従来考えていたよりも良く発達し、音ばかりでなく音楽に反応し、心拍数の変化、母親のムードによる体動の変化、さらには記憶の可能性も完全には否定できない知見が報告されている。したがって、胎児期の母子関係も、心理的さらに情動的な立場での検討が必要となるだろう。

乳児期の母子関係で重要なのは、後に述べる母子相互作用とともに母乳哺育である。少なくとも、現在のように良質の人工栄養乳品（いわゆる粉ミルク）が開発され大量生産が可能になるまでは、母乳哺育なくしては育児はほとんど不可能であった。したがって、乳児期の母子関係も母乳哺育によって、生物学的に形成されると言っても過言ではあるまい。とくに、上述のアタッチメント形成のメカニズムの二次性強化説をとっても、本能依存性的エネルギー説をとっても、母乳哺育の重要性は変わらないし、後に述べる母子相互作用の中でも母乳哺育は重要な役目を果たしている。

生物学的な視点をさらに強調するならば、進化の歴史の中で、哺乳類発生とともに、そして数百万年前に発生した人類になってからも、母乳哺育は続けられてきたわけである。しかも生後1年近くになって、よちよち歩きするまで、



図1 母子相互作用

母親の胸に抱かれ育てられてきたのである。したがって、この期間の母乳哺育をふくめた母親による子育ては、父親と異なった何かがあると思われる。粉ミルクができたからといって、簡単に父親によって代行できるものではない。

母子相互作用とは何か

母子関係が機能するためには、母親のわが子への母性愛(maternal love)と、子どもの母親への愛着(アタッチメント: attachment)とがなければならない。この母性愛と愛着のありなしなのが、平たい言葉で呼べば「母と子の絆」であり、母子関係の精神心理的基盤である。絆は英語で“bond”“tie”と訳されている。

絆はつなぎ止める綱から来た、断とうに断ち切れない人の結びつきという意味とともに、「ほだし」という意味もある。すなわち、束縛される、人情に引かれて心や行動の自由が制約されるのである。母と子の絆のありかによって、子どもの自律や自立が束縛されるのはその例であらう。

さて母子相互作用(mother infant interaction)とは、母親の育児行動により、心の絆、すなわち母親には母性愛、子には愛着が相互的

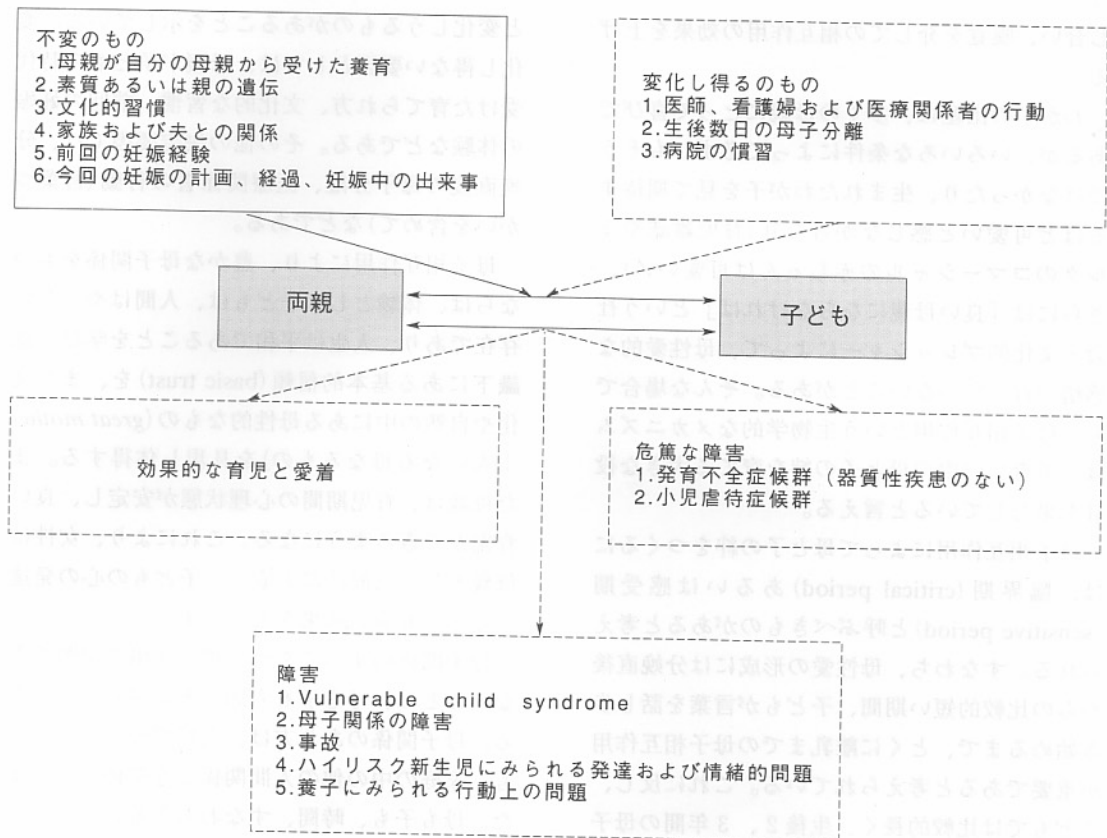


図2 母性行動に及ぼす影響因子とその障害⁽¹⁾

につくられるということである。妊娠期間中、母子は生物学的に結合しているが、分娩によって母と子がそれぞれ独立した存在になり、それが情動的に、さらには精神・心理的に再結合するということである。

母子相互作用で行なわれるのは、母子間のスキンシップ豊かな行動のやりとりであって、触覚・視覚・聴覚・嗅覚などの五感を介して、生物学的情報を介してのやりとりである。味覚は特殊で、母乳哺育で重要な役割を果たしている。

母子相互作用の心理行動面を強調するならば、母と子はそれぞれ合図行動（シグナル行動）と反応行動（レスポンス行動）から成り立っている（図1〈前頁〉）。

子どもが泣く（合図行動）ことに対して、母親は抱き上げなだめる（反応行動）、母親の語りかけ（合図行動）に対して、子どもはほほえむ（反

応行動）というように、子育て行動の中で表裏一体となって自然に行なっているのである。

育児行動の中で、母親は「抱く」「おんぶ」「撫でる」「頬ずりする」「ひたいにキスする」など、スキンシップを目的とする行動、また、「イナイイナイ、バー」「タカいたかい」「体をくすぐる」など「あそび」を目的とする行動、さらに「哺育」「沐浴」「衣服をきせる」など、生活の世話を目的とする行動をとる。

母乳哺育は、“enface”の体位をとり、顔と顔、目と目（eye to eye contact）を合わせやすく、視覚による相互作用とともに、感覚の敏感な乳児の口唇と母乳の乳頭のふれあいによる相互作用が行なわれながら、母乳という良質の栄養が与えられる。また、母乳の味が吸っている時間とともに微妙に変化するので、乳児の味覚、さらには母親とか乳児の体臭をお互いに感

じ合い、嗅覚を介しての相互作用の効果を上げる。

わが子の出産は、多くの母親にとって喜びであるが、いろいろな条件によって必ずしもそうではなかったり、生まれたわが子を見て期待するほど可愛いと感じなかったり(育児雑誌やミルクのコマーシャルの赤ちゃんは可愛い!)、さらには「良い母親にならなければ」という社会・文化的プレッシャーによって、母性愛的な感情が育っていないことがある。そんな場合でも、母子相互作用という生物学的なメカニズムは、子育ての中で母と子の絆を育てる大きな役目を果たしていると言える。

母子相互作用によって母と子の絆をつくるには、臨界期(critical period)あるいは感受期(sensitive period)と呼ぶべきものがあると考えられる。すなわち、母性愛の形成には分娩直後の比較的短い期間、子どもが言葉を話し歩き始めるまで、とくに離乳までの母子相互作用が重要であると考えられている。これに反し、子どもでは比較的長く、生後2、3年間の母子相互作用によってアタッチメントを確立することができるようである。いずれにしろ、個人差の多い事は重要である。

われわれのサーモグラフィーで、母子分離状態の乳児のストレス反応を顔面(とくにひたい)の皮膚温度の変化でみると、従来考えられているよりも早く、生後2～3か月になると、すでにアタッチメントは確立しているようである。

母親の育児行動も、哺乳動物霊長類の一種として、ヒトのそれとして見るならば、生得的さらには genetically determined の部分が大きいが、文化をもつ存在としては、多様な因子が関係している。Klaus と Kennell は、図2(前頁)のように整理している。すなわち、不変のもの

と変化するものがあることを示している。変化し得ない要因としては、母親が子どもの時代受けた育てられ方、文化的な習慣、前回の妊娠の体験などである。その他の決定要因では、分娩直後の母子分離、医療関係者の行動(言葉づかいを含めて)などである。

母子相互作用により、豊かな母子関係をもつならば、体験として子どもは、人間はやさしい存在であり、人生は平和であることを学び、意識下にある基本的信頼(basic trust)を、また文化や自然の中にある母性的なもの(great mother: 大いなる母なるもの)を具現し体得する。また母親は、育児期間の心理状態が安定し、良い育児ができるようになる。これにより、女性は母親として人間的に大成し、子どもの心の発達にとっても良い結果をもたらす。

母子関係のすべてを母子相互作用で説明できないことは、母も子も人間である限り当然である。母子関係のあり方は、夫婦関係のあり方とも、家庭の中の他の人間関係とも関係する。また、母も子も、時間、すなわち年齢によって変化しているし、ある時点の母子関係のあり方は、次のあり方に関係することも当然である。

まとめ

母子関係を医学・生物学的に捉え、その基盤となる母と子の絆形成のメカニズムを母子相互作用の立場から論じた。ご批判いただければ幸いである。

(こばやしのぼる・小児科学)

参考文献

- (1) Klaus, M. H. & Kennell, J. H.: 母と子のきずな(竹内・柏木訳)、医学書院、1979